

学会記事

第43回徳島医学会賞及び第22回若手奨励賞受賞者紹介

徳島医学会賞は、医学研究の発展と奨励を目的として、第217回徳島医学会平成10年度夏期学術集会（平成10年8月31日、阿波観光ホテル）から設けられることとなり、初期臨床研修医を対象とした若手奨励賞は第238回徳島医学会平成20年度冬期学術集会（平成20年2月15日、長井記念ホール）から設けられることとなりました。徳島医学会賞は原則として年2回（夏期及び冬期）の学術集会での応募演題の中から最も優れた研究に対して各回ごとに大学関係者から1名、医師会関係者から1名に贈られ、若手奨励賞は原則として応募演題の中から最も優れた研究に対して2名に贈られます。

第43回徳島医学会賞および第22回若手奨励賞は次に記す方々に決定いたしました。受賞者の方々には第260回徳島医学会学術集会（夏期）授与式にて賞状並びに副賞（賞金及び記念品）が授与されます。

徳島医学会賞 （大学関係者）



氏 名：柏原秀也
出身大学：徳島大学医学部医学科（徳島大学大学院医学研究科博士課程修了）
所 属：徳島大学大学院医歯薬学研究部消化器・移植外科学分野

研究内容：非アルコール性脂肪肝炎（NASH）に対する新たな外科治療の開発

受賞にあたり：

この度は第43回徳島医学会賞に御選考いただき、誠にありがとうございました。御選考していただきました諸先生方、並びに関係者各位の皆様に深く御礼申し上げます。

肥満症・メタボリックシンドロームは世界的に流行しており、生命予後を短縮する病気です。日本も例外ではなく着実に肥満人口は増加しています。高度肥満（BMI 35kg/m²以上）に対する手術治療は欧米を中心にスタン

ダードな治療法であり、日本でも2014年4月より保険収載されました。英語では Bariatric and metabolic surgery、日本語で減量・肥満・代謝外科（メタボリックサージェリー）といい、その効果は減量のみならず、糖尿病をはじめとした代謝疾患の改善も報告されています。

非アルコール性脂肪肝炎 NASH は、肝臓に脂肪沈着、炎症、線維化といった変化を生じる病気ですが、これは肥満や糖尿病、高脂血症、高血圧などの生活習慣病と密接に関連しているとされています。この NASH は増加傾向にありますが、有効な治療薬がないのが現状です。

近年、腸内細菌叢 microbiome の変化が、さまざまな疾患の発症に関与していることが報告されています。高脂肪食を摂取するとこの microbiome は、腸管炎症を惹起しバリア機能を破綻することで炎症性サイトカインがインスリン標的臓器である肝臓や脂肪に達し、NASH やインスリン抵抗性を発症させることが報告されています。さらに NASH 形成の過程では microbiome や免疫細胞は反応変化することが知られています。

今回、われわれは Metabolic surgery の NASH 改善効果について、microbiome の変化・腸管炎症抑制・免疫能改善に着目し、興味深い知見が得られましたので報告致しました。

まず、検討1としてラットを用いた基礎的検討を行いました。肥満・糖尿病ラットを metabolic surgery の一つである Duodenal-jejunal bypass (DJB) 施行群 (D)、開腹のみ行った Sham 群 (S)、GLP-1アナログである Liraglutide (200µg/kg/day) 投与群 (L) の3群に分け、術後8週で血糖、腸管炎症性サイトカイン、腸管接着因子 claudin-1、肝臓における NASH grading/staging、microbiome を比較・検討致しました。すると D 群の microbiome では Proteobacteria の増加や Bacteroides の減少といった変化がみられ、腸管炎症性サイトカイン IFN γ 、IL1 β 、TNF α は抑制されていました。さらに腸管接着因子である claudin-1 が強発現しており、腸管バリア機能が維持されていることが示唆されました。結果として他2群と比較し D 群の insulin 抵抗性は改善し、NASH grading/staging は軽度でした。

続いて検討2として、スリーブ状胃切除 (SG) を施行した肥満患者15例の超過体重減少率 (%EWL)、AST/ALT、脂肪肝の程度を示す肝/脾比 (CT値)、肝線維化を表す FIB4index、免疫・炎症指標である好中球/リンパ球比 (NLR) を比較しました。術後3ヵ月・6ヵ月・1年 %EWL は 46.3、50.8、47.4% となりました。手術時

に行った肝生検では全例 NASH と診断されましたが、術後 AST/ALT, FIB4index, 肝/脾比は改善していました。さらに術後3ヵ月の NLR は術前より低下しており、術後 SG による炎症・免疫機能の改善が示唆されました。

本研究により、Metabolic surgery の NASH 改善メカニズムには microbiome の変化や腸管炎症沈静化、免疫機能改善が関与していることが示されました。今後、Metabolic surgery が NASH の治療選択肢となることが期待されます。

最後になりましたが、本研究を進めるにあたり、ご指導ならびにご協力を賜りました島田教授をはじめ教職員、関係者の方々にこの場をお借りしまして深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

(医師会関係者)



氏 名：笠松由華
出身大学：徳島大学医学部医学
科 (H.11年卒)
所 属：医療法人かさまつ在
宅クリニック

研究内容：徳島県における小児在宅医療の現状と今後の医学教育に期待すること
～TUPS を通じて見えてきたもの～

受賞にあたり：

この度は第43回徳島医学会賞にご選出いただき、誠にありがとうございました。ご選考していただきました諸先生方、並びに関係者各位の皆様にご心より御礼申し上げます。

私は今から約12年前、第2子を妊娠中に徳島県立中央病院小児科を退職しました。私が勤務していた当時、県下の小児救急医療体制、新生児医療体制の整備が急がれていた中で、救命はできても退院できないお子さんが少なからず存在しました。急性期医療の時期が過ぎても尚、何らかの医療的ケアが必要な場合、後方療育機関へ転院することが殆どで、「人工呼吸器を装着したままご自宅に帰る」といったような選択肢はなかったように記憶しています。

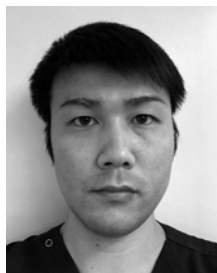
7年前に在宅療養支援診療所を開設した当時、「小児在宅医療」という言葉が少しずつ聞かれ始めました。ところが、一般開業医が小児科外来で診療していても、所

謂「医療的ケア児」が受診することは極めてまれで、そのようなお子さんが徳島に何人ほど存在するのかわかりませんでした。ある児童デイサービスの囑託医を引き受けたときに、胃瘻から経管栄養を行うお子さんや気管切開をされているお子さんなどが、まるで学童を利用するように放課後に集まってくる様子に、私は衝撃を受けました。誰よりも医療の助けを必要とするはずの「医療的ケア児」とそのご家族に対する支援があまりにも乏しく、なにより、小児科医である自分が「医療的ケア児」の実情を全く知らなかったことがショックでした。

この仕事に携わってからは、小児の訪問患者数も徐々に増え、特に2年程前からは、より高度な医療的ケアを常時必要とする「医療的ケア児」が急増しています。今日、医療技術の進歩、在宅医療機器の開発、地域における医療・介護資源の充実に伴い、成人の在宅医療が身近になってきています。そして、そのシステムの対象を小児にまで拡大し、ご自宅（地域）で暮らす選択をするご家族が増えています。しかしながら、小児の場合は、多くの場合が生まれつきの障がいのために、“生きるための”呼吸・栄養・排泄などを医療機器・医療的ケアに頼って生きていかねばなりません。“終の棲家”としてご自宅を選択されることの多い成人の在宅医療とは異なり、小児の在宅医療はゴールが見えません。その負担をご家族だけが背負うことがないように、地域全体での支援体制構築が急務です。まだまだ医療と福祉との連携は不十分ですが、現場の声を代弁することで、医療的ケア児とそのご家族が普通に暮らせる社会になるように、微力ながら貢献していきたいと思えます。

今回の発表に先立ちまして、小児医療に関心を持つ医学生に小児在宅医療の現状と課題を知ってもらう、貴重な機会を与えて下さった徳島大学小児医療研究会 (TUPS) の須賀健一先生に、深謝致します。ひとりでも多くの医学生が、学生の中に小児在宅医療にも関心を持ち、こどもたちやご家族に寄り添う小児医療について考えて下されれば幸いです。

若手奨励賞



氏 名：秋本雄祐
 生年月日：平成5年8月7日
 出身大学：徳島大学医学部医学
 科
 所 属：徳島県立中央病院医
 学教育センター

研究内容：当院における過去10年間の外傷性小児骨折についての検討

受賞にあたり：

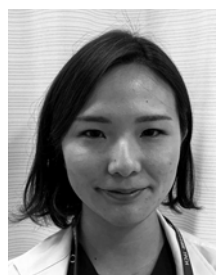
このたびは徳島医学会第22回若手奨励賞に選考いただき、誠にありがとうございます。選考してくださいました先生方、並びに関係者各位の皆様に深く感謝申し上げます。

小児期の骨折は common な疾患であり、また適切な治療がなされなければ成長障害や可動域制限などの機能障害を生じ、QOLに関わることがあります。にもかかわらず、直近10年間で明確な疫学的検討がなされていないことが明らかになり、本研究を行う運びとなりました。研究結果からはこれまでと同様に、男児・上肢骨折が多いことが明らかになりましたが、特記すべき点としてコンタクトスポーツで骨折が多いこと、当院では手術率が高いことが挙げられました。本結果は後向き研究で紹介はなされておらず、指導者やプレーヤーに対する骨折予防の啓蒙活動が骨折件数減少に寄与するかどうかまでは明らかではありません。今後はそういった活動を通じて件数減少に寄与する可能性を模索したいと思います。

今回はデータ収集から結果、考察までを主体的におこなった初めての研究でした。1つ1つ患者様のカルテや画像をくまなく閲覧し結果をまとめ、他文献を検索し考察する一連の作業は苦労の連続でしたが、無事期限内に終え発表することができました。結果の解釈や考察、発表の様式、時間配分やわかりやすいグラフ作成など多くのことを当院の諸先生方にはご指導いただきました。これまで症例報告しか行ったことがなく、複数症例の後ろ向き検討を行い発表した経験は初めてで、とても貴重で有意義な経験をさせていただきました。今後も研究活動を重ね、日本や世界に研究成果を発信できるよう研鑽を重ねたいと思います。

最後になりましたが、このような貴重な経験および発表の機会を与您とごさり、ご指導賜りました徳島県立中央病院の濱口隼人先生をはじめとする整形外科の先生

方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



氏 名：山本翔子
 生年月日：平成7年2月16日
 出身大学：自治医科大学医学部
 所 属：徳島県立中央病院医
 学教育センター

研究内容：EGFR 遺伝子変異陽性非小細胞肺癌の再発に対してニボルマブが有効であった一例

受賞にあたり：

この度は徳島医学会第22回若手奨励賞に選考いただき、誠にありがとうございます。選考してくださいました先生方、並びに関係者の各位の皆様に深く感謝申し上げます。

分子標的薬の登場によって、治療の選択肢が大幅に広がり、進行肺癌の生命予後の改善に大きく寄与しました。さらに、分子レベルでがんのタイプを把握し、患者ごとに治療を選択する「個別化医療」の時代へと変化し、現在は当たり前の考え方のように感じている印象です。癌細胞からの抑制性シグナルを遮断することでT細胞を活性化させる免疫チェックポイント阻害薬（ICI）は、遺伝子変異がなく、PD-L1発現が多い場合に選択されてきました。従来、EGFR 遺伝子変異陽性非小細胞肺癌に対し、抗PD-1抗体の治療効果が乏しいとされてきましたが、mutation 別の分子機序やEGFR-TKI 耐性の機序など完全には解明されていないことも多く更なる報告が期待されます。今回、本症例を発表させていただくにあたって、非小細胞肺癌治療の基本的概念から、遺伝子変異による抗がん剤の選択、及びEGFR-TKI 耐性など超高齢化社会における近年の内科学において非常に興味深い分野を自ら調べ勉強する機会を與えていただきました。新規薬剤と薬剤耐性のいたちごっこは感染症領域でよく見られる印象でしたが、癌薬物療法の領域にもその時代が訪れていることを今回初めて知り、今後の医療について考えさせられました。

最後になりましたが、このような貴重な経験及び発表の機会を与您とごさり、ご指導賜りました徳島県立中央病院の鈴江涼子先生、葉久貴司先生をはじめとする先生方にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。